

「世界文化遺産」、「世界の記憶」、そして「世間遺産」：旧産炭地筑豊、田川市にもたらされた「遺産」概念と地域住民の語り口

川松, あかり
東京大学大学院

<https://doi.org/10.15017/2344813>

出版情報：九州人類学会報. 43, pp.11-18, 2016-11-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

「世界文化遺産」、「世界の記憶」、そして「世間遺産」

—旧産炭地筑豊、田川市にもたらされた「遺産」概念と地域住民の語りロー1

川松あかり（東京大学大学院）

キーワード：世界遺産、世間遺産、語り、世間話、旧産炭地

I はじめに

九州における「世界遺産をめぐる文化ポリティクス」の展開において、福岡県筑豊地域の中核都市の一つ、田川市は、極めて劇的な経緯をたどってきたと言える。「九州・山口の近代化産業遺産群」²の一員として世界文化遺産への登録を目指した筑豊の遺産は、2009年にその構成資産から除外された。一方で、これと入れ替わりに登録運動の過程で海外専門家に見出された山本作兵衛氏の炭坑記録画・記録文書等が、2011年に日本で初めてユネスコ「世界の記憶 (Memory of the World)」³に登録されたのだ [山本作兵衛氏の炭坑の記

¹ 2016年11月に行われた九州人類学研究会オータムセミナーでの発表時のタイトルは「筑豊地域における炭鉱の語り継ぎと二つのユネスコ遺産—記憶継承への期待と失望の中で—」であったが、本報告執筆にあたって議論の焦点を絞り、改めてこれに対応する表題を付した。

² 2015年に世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の2007年時点での名称は、「九州・山口の近代化産業遺産群—非西洋世界における近代化の先駆け」であった。

³ “Memory of the World”は、ユネスコの「三大遺産事業」の一つとされ、日本のメディアなどでは一般に「世界記憶遺産」という名称が広く浸透している。一方、文部科学省や日本ユネスコ国内委員会では、これまで「ユネスコ記憶遺産」という名称が用いられ、略称として「MOW」も用いられてきた。しかし、東アジアにおいて近年、“Memory of the World”登録をめぐる動きが政治問題化していることを背景に、2016年6月、日本ユネスコ国内委員会は、今後「世界の記憶」という名称を用いることを決めた [朝日新聞デジタル 2016年6月20日「「記憶遺産」→「世界の記憶」に改称 ユネスコ国内委」<http://www.asahi.com/articles/ASJ6N53LNJ6NUCLV00Q.html> (2016/8/29 閲覧)]。本稿では、こうした政治的動向を特に考慮したわけではないが、報告の際に用いた名称に準じて“Memory of the World”の直訳である「世界の記憶」という名称を用いることとする。

録画並びに記録文書の保存・活用等検討委員会他 2012 : 2-4]。

こうした世界遺産登録をめぐる大きな動きとも連動して、これまで多くの住民が「負の遺産」とみなして語りたがらなかったという筑豊炭鉱へのまなざしにも変化が生じた。こうした動きは、本セッションの各報告者が取り上げた地域における展開とも一致するものがある。本報告では、筑豊における世界遺産登録運動の拠点でもあった田川市石炭・歴史博物館の周辺で炭鉱を語る枠組みがいかに変容してきたのか、そして、新たに生じた枠組みの中で、2015年夏現在、地域住民が炭鉱を語る語り口とはいかなるものであったのかを分析することを試みた。以下、本稿ではその論点を整理し、炭鉱を語り伝える新しい実践の導入が田川市においてどのような展開をみせたのかについて明らかにしたい。

II 世界遺産登録運動と語りの枠組みの変容

福岡市博物館館長の有馬学 [2014a、2014b] は、「筑豊をはじめとする旧産炭地を歴史的に対象化しようとするこれまでの視線は、あたかもそれが必然であるかのように、何かしら重苦しいものをもとなっていた」[有馬 2014 : 23] と指摘する。確かに、筑豊炭鉱については炭鉱閉山期以降の失業問題や地域荒廃、戦時中の外国人強制労働の問題など、〈重い〉歴史的事実がメディアによって様々に表象され、また一部ながら地域住民によっても熱心に語り継がれてきた。これに対して、有馬は、木村氏の報告で取り上げられた軍艦島（端島）の観光クルーズや、本特集の趣旨説明を執筆した永吉氏のフィールドである三池その他の旧産炭地における炭坑遺跡のファンクラブを、炭鉱を対象化する〈軽い〉まなざしの登場として提示しながら、これらが「かつての地域アイデンティティの根拠であった石炭をもう一度違う角度から見直し、地域の自画像として描き直す可能性を示している」[有馬 2014b : 160] と論じている。ここで、有馬が述べたような炭鉱をめぐるこれまでの言説の枠組みを「〈重い〉語り」と呼ぶなら、世界遺産登録運動の過程は、田川市にもこの「〈重い〉語り」とは異なる新しい語りの枠組みがもたらされた過程であったと言える。

「九州・山口の近代化産業遺産群」に、田川市から三井田川鉱業所の伊田竪坑櫓と二本の煙突が加わった翌年の2008年、田川市石炭・歴史博物館では、館長講座「炭坑の語り部」が始まった。この記録テキスト集 [田川市石炭・歴史博物館（編） 2010a、2010b、2013] を見ると、講座開始当初、「炭坑の語り部」のテーマは、竪坑櫓と二本煙突という

「物」としての遺産を軸としたものが多く、「語り部」たちには主としてこの「物」に付随する経験を語ることを求められていたことがわかる。これに対し、2009年にこれらの遺産が構成資産から除外され、代わりに山本作兵衛の炭坑記録画等の「世界の記憶」への申請手続きが進められると、2010年度には「炭坑の語り部」のテーマや「語り部」の属性が大きく広がり、炭鉱にまつわる多様な「記憶」全般を聞き取り記録することそのものに価値が置かれるようになった〔川松 2014: 58-61〕。

このように、世界文化遺産から「世界の記憶」へと田川市の世界遺産登録運動における目標が移り変わる中で、田川市ではこの2つの国際的な価値観に基づく語りの枠組みが、博物館での行政的な仲介を経てもたらされ、炭鉱を具体的に伝える「語り部」個々人の語りの枠組みを規定してきたのである。

III 輸入された「世間遺産」のパラドクス

直接炭鉱時代の経験を持つ「炭坑の語り部」たちが高齢化する中、2014年に田川市石炭・歴史博物館では「まち歩きガイド養成講座」という市民参加型の事業が始まった。2014年度には、九州大学大学院芸術工学研究院の藤原恵洋教授研究室から助言と協力を得て、受講者がまち歩きを体験し、自らまち歩きルートマップを作るという実践が行われた〔田川市文化遺産活用実行委員会 2015b〕。翌2015年度には前年の受講者のうち11名による「炭都田川ガイドの会」が結成され、外部専門家には頼らずに、前年度に作ったマップを使って会員が自分でまち歩きガイドを実践した。

1年目の「まち歩きガイド養成講座」終了後に行われた「まち歩きシンポジウム」の報告書〔田川市文化遺産活用実行委員会 2015a〕を見ると、この事業は大牟田・荒尾や中間市など既にまち歩きを実践してきた地域を「先進地」〔田川市文化遺産活用実行委員会 2015a: 3〕とし、これを田川市にも導入しようという意図を持って行われていたことがわかる。そして、ここで登壇者たちが重視していたのが、「世間遺産」という概念やこの概念に含まれる価値観である。本事業では、「世間遺産」という枠組みが、外部専門家から博物館の仲介を経て、個々のガイドにもたらされたと考えられるだろう⁴。

⁴ 2016年11月の本セッション終了後、担当の博物館職員に発表の報告を行った際、職員は報告者に、「世間遺産」という概念について職員自身やガイドの方たちはあまり意識していない、と述べた。確かに、報告者はガイド自身が「世間遺産」という言葉を口にする

「世間遺産」とは、「先人の知恵や技術など、次世代に伝承すべき遺産のなかで、地域の人々（市民）が自ら発見し、地域の宝物として価値づける遺産」[永吉 2010: 120] である。これは、「世界遺産」という地域住民の価値観を置き去りにしたグローバルな枠組みに警鐘を鳴らし、地域の人々自身が活用し、伝承していくものに価値を与える点[永吉 2010: 121] で、大きな意義があった。ただし、この「世間遺産」の田川市への導入経路は、矛盾を抱えたものであるように思われる。この事業が、ガイドたちに地域の「遺産」を発信することへの希望をもたらしたことは事実だろう。しかし、田川市でのまち歩き事業においては、「自ら発見し、地域の宝物として価値づける」べき「遺産」(=「世間遺産」)を、ガイドが「自ら発見」する以前にあらかじめ外部専門家や行政から価値づけられ、与えられるというパラドクスの状況が生じてしまっているのである。結果として、あるガイドが博物館職員に向かって冗談で、「見学者にぜひ知ってもらいたいなっていうもの」について「脚本を書いて」と発言したことに象徴的に表れているように、ガイドたちにとっては、いかに「遺産」という視点をもたらしてくれた専門家や博物館のまなざしに応えることで地域の魅力を発信するか、ということこそが重要懸案となっている様子がうかがえるのである。

しかも、ガイドたちが応えようとする相手は、「世間遺産」という枠組みをもたらした外部専門家や博物館だけではない。報告者が 2015 年 8 月に参加した、まち歩きに向けたガイドたちの意見交換会では、炭鉱で命を落とした外国人の慰霊碑の歴史や、慰霊碑を管理する市民グループ、そして、観光客やまち歩きには興味がないと予想される地元の人々など、様々な他者の存在を意識した言葉が飛び交い、ガイドたちがこれらの期待に応えることで、まち歩きに人を惹きつけたいという想いを持って活動している様子が読み取れた。

場面を見たことがない。この指摘は事業の実践者からの批判として極めて重要なものであると考えるため、ここに記しておきたい。一方で担当職員は、全てのものが見せ方や角度によって遺産のようなものになり得るということはガイドたちも勉強している、とも話した。実際のまち歩きに参加した際も、藤原蕙洋教授のおかげで普段見ているのとは全く違う町の切り取り方を学んだ、といきいきと語ってくれたガイドの方もいた。以上から、報告者は、その用語自体は定着していないとしても、いわば「『世間遺産』的価値観」（←日本語ではクォーターションマークの使用はなるべく控えた方がよいでしょう）とでもいふべきものが、本事業の背後にある枠組みとして影響を及ぼしていると考える。そして、上述のガイドの発言からもうかがえるように、その枠組みはもちろん市民にとってプラスの意義も持つのだということも、念のためここに指摘しておきたい。本報告は、そのうえで、「世間遺産」という価値観の導入過程が「炭都田川ガイドの会」に与えた効果の内実を、より注意深く分析することを意図している。

結果として、ガイドたちはこの会議の場で語り合う間にも、炭鉱の〈重い〉歴史的事実や地域に存在する様々な現実、多様な関心のぶつかり合いをも経験する。こうして「遺産」なるものを発見し、発信することへの困難にも直面しながら、ガイドたちは地域の歴史を発信する自らの手法を模索していたのである。

IV 枠組みとしての「世間遺産」のもとでの「世間話」

とはいえ、上に示したようなやりとりを、ガイドたちは必ずしも〈重い〉語り口で行っていたわけではない。見落としてはならないのは、ガイドたちの語り口の持つ独特の質感である。ガイドたちの言葉は、ぼつぼつと慎重に紡ぎ出されるかと思えば、次の瞬間には勢いよく会場の場に投げ込まれ、気が抜けたようにどっと笑いが起こったりもする。そこはまるで、世間話の場のような雰囲気であったのだ。

民俗学において「方法としての〈世間話〉」を提唱した重信幸彦[1989]は、私たちは決して「自分の言葉」と呼べるようなものを手にしているわけではなく、言葉は自分の身の丈を越えたところで組織され、一方的に日常に覆いかぶさってくると指摘する。そして、それでもなお等身大のレベルから聞く者と語る者の「現在」を意識化させる場として、〈世間話〉の現出する場の重要性を論じた。本報告が着目した「炭都田川ガイドの会」の会議は、ガイドたちが自身とは離れたところで組織された「世間遺産」という枠組みの中で言葉を紡ぎ出そうとする場であったと言える。ここにはさらに、世界遺産中心的な言説や〈重い〉歴史的事実をめぐる言説、そして地元のまち歩きに住民は無関心であろうという地域の現状認識をめぐる言説など、ガイドたちを取り巻く様々な言葉の枠組みも覆いかぶさってくる。しかし、それらの言葉は、ガイドたちによって極めてぎっくばらんな〈世間話〉の語り口で紡ぎ出されていた。この語り口の中にこそ、ガイドたちにとっての等身大の現実、地域を「遺産」として語ることへの希望も悩みも諦めも含んだ現在が見出されるのである。

V おわりに

本報告では、筑豊、田川市の石炭・歴史博物館において炭鉱を語る枠組みが、世界遺産登録運動の情勢にもなまって変化する過程を概観してきた。田川市石炭・歴史博物館が主

導してきた事業において、語りの枠組みは外部専門家を通して博物館という行政の仲介を経て導入され、具体的に炭鉱を語り伝える個々人の語りを規定していた。この導入経路は、自ら発見されるべき「世間遺産」という枠組みの導入においてはパラドクスを抱えてしまう。「世間遺産」という枠組みを与えられ、「遺産」を伝達しようとする中で、ガイドたちはむしろ地域の多種多様な他者の存在を意識化し、その期待に応えようとして「遺産」化の困難にも直面するのである。

とはいえ、ガイドたちはそんな現実や歴史的事実の〈重さ〉を前に沈黙するのではない。「世間遺産」の枠組みの下に出現した語りの場で、ガイドたちは「遺産」化への期待感も失望感も共に含みこんだ〈世間話〉のような語り口で話し合っていた。筑豊には、未だに自分自身や地域の歴史を後世に伝える言葉を手にしていない人々や、〈重い〉炭鉱の語りを担ってきた人々も少なからず存在することを考慮に入れるなら、「炭都田川ガイドの会」の成果は、ガイドたちが「地域の宝物」や「遺産」なるものを発見したかどうかよりもむしろ、「遺産」化への期待も失望も、華やかな歴史も〈重い〉歴史も絡み合う、地域にとっての炭鉱という存在が、この場で黙されることなく確かに語られ、共有されているということにこそあるのではないだろうか。ガイドたちが語る〈世間話〉的なその語り口は、田川市の炭鉱に「遺産」というまなざしが持ち込まれる過程で、「炭都田川ガイドの会」が2015年夏の時点で手にしていた、炭鉱の過去や地域の現実に向き合い直して地域を語り出すための最もいきいきとした語り口であったように思われる。

セッションの質疑においては、直接観光誘致や経済活性化を目的としない事業を行う行政や、参加する市民のモチベーションとは何であるかを問われた。行政や個々のガイドたちがこの事業に惹きつけられる背景や、個別の想いをより深く聴取していくことは、今後の課題となっている。

また、今回報告者がとらえたガイドたちの語りは「世間遺産」が創出される過程で現れる、ある一時点での語り口だったのかもしれない。2015年度のまち歩きは、大盛況の中幕を閉じた。ガイドたちの「遺産」へのまなざしも、より強固なものとなっていくだろう。しかし、遺産化のプロセスに着目するのが人類学であるなら、「遺産」という枠組みを与えられ、そこに希望も不安も抱えながら炭鉱の過去を語ろうとする市民の、その時々〈いま〉の語りを聞き続けることもその役割ではないか。そして、それこそが、今日社会において支配的な価値観となっている「遺産」という枠組みを超え、旧産炭地に存在するより多様な市民の実践も視野に含みこみながら、地域住民にとっての炭鉱の意味、そして、炭

鉦を今対象化し語り継ぐことの意味を探ることにつながっていくように思われるのである。

【参考文献】

有馬学

2014a 「消滅した〈近代〉と記憶遺産：いま作兵衛画の何を問題にすべきか」『山本作兵衛と日本の近代』有馬学、マイケル・ピアソン、福本寛、田中直樹、菊畑茂久馬（編）、pp.5-24、弦書房。

2014b 「結びにかえて：〈方法〉としての山本作兵衛」『山本作兵衛と日本の近代』有馬学、マイケル・ピアソン、福本寛、田中直樹、菊畑茂久馬（編）、pp. 154-163、弦書房。

川松あかり

2014 「〈語り部〉生成の民俗学に向けて—記憶・過去・人との出会いと語りの実践—」東京大学大学院総合文化研究科修士学位論文（未公刊）。

重信幸彦

1989 「『世間話』再考：方法としての「世間話」へ」『日本民俗学』180：1-35。

田川市石炭・歴史博物館（編）

2010a 『田川市石炭・歴史博物館館長講座記録集1 炭坑の語り部Ⅰ：平成20年度「炭坑の語り部」の記録』田川市石炭・歴史博物館。

田川市石炭・歴史博物館（編）

2010b 『田川市石炭・歴史博物館館長講座記録集2 炭坑の語り部Ⅱ：平成21年度「炭坑の語り部」の記録』田川市石炭・歴史博物館。

田川市石炭・歴史博物館（編）

2013 『田川市石炭・歴史博物館館長講座記録集3 炭坑の語り部Ⅲ：平成22年度「炭坑の語り部」の記録』田川市石炭・歴史博物館。

田川市文化遺産活用実行委員会

2015a 『「まちの魅力」発見！まち歩きシンポジウム報告書』田川市文化遺産活用実行委員会。

2015b 『田川市まち歩きガイドブック：炭都田川を歩く 炭坑町たがわウォーク』田川市文化遺産活用実行委員会。

永吉守

「世界文化遺産」、「世界の記憶」、そして「世間遺産」

- 2010 「近代化産業遺産を活かす（Ⅱ）：大牟田・荒尾の事例から―」『観光とまちづくり：地域を活かす新しい視点』深見聡、井出明（編著）、pp.114-128、古今書院。
山本作兵衛氏の炭坑の記録画並びに記録文書の保存・活用等検討委員会、保存調査検討部
会、活用調査検討部会、受入環境調査検討部会、記念式典検討部会
- 2012 『山本作兵衛氏の炭坑の記録画並びに記録文書の保存・活用等に係る検討結果報告書』
http://www.joho.tagawa.fukuoka.jp/kentou_iinkai/page_972.html?pg=1
(2016年3月31日 最終閲覧)。

(2016年8月9日原稿掲載承認)